

小学校高学年のベースボール型における投げられたボールを打つ能力を高めるための 学習指導プログラムに関する研究

スポーツ文化研究領域

5011A023-3 甲斐 徹也

研究指導教員：吉永 武史 准教授

【問題の所在】

2008(平成 20)年改訂の小学校学習指導要領では、ボール運動系の領域における種目の取扱いがその種目に固有の特定された技能ではなく、攻守の特徴や「型」に共通する動き、技能を系統的に身につけるとする視点から整理され、高学年のボール運動では「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」で構成されるようになった。しかし、ベースボール型は、「学校の実態に応じて取り扱わないことができる」(文部科学省,2008,p.73)となっており、他の内容と同等とは言えない現状がある(中川,2006)。さらに、ベースボール型授業のほとんどがティーボールを用いた授業であり、易しく投げられたボールを打ったりすることに焦点を当てた授業実践は、ほとんど行われていない。

【本研究の目的】

本研究では、小学校高学年を対象に投げられたボールを打つ能力の向上を目指したベースボール型の学習指導プログラムを作成し、その有効性について検証することを目的とする。

【各章の概要】

<第1章>

第1章では、投げられたボールを打つための条件を打撃動作の習熟段階、タイミング一致、スポーツバイオメカニクスの知見からみる理想となる打撃動作という3つの観点から検討した。その結果、上肢と下肢が連携したスイング動作を行うことは小学校高学年の目標として妥当であること、限られた授業時間の中で投げられたボールを打つことができるようになるためには、身体操作に自己の意識を向けることができる時間的正確性を担保する必要があること、そして理想となる

打撃フォームが明らかとなった。それらの結果をもとに、バックスイング期6項目、フォワードスイング期3項目、フォロースルー期2項目の計11項目からなる打撃動作の評価基準を作成した。

<第2章>

第2章では、学習指導プログラム作成の手がかりとなる体育科教育学の知見を検討するとともに、予備的实践としてティーボールのみの学習(A実践)を行い、それが投げられたボールを打つ能力の向上にどの程度貢献するかを検証した。その理由として投げられたボールを打つ能力の向上を目指した学習指導プログラム作成の際に、止まっているボールを打つことの投げられたボールを打つ能力への学習効果を検証する必要があると考えたからである。また、本研究における成果の分析は、形成的授業評価、プログラム前後におけるバッティングテストの打球の飛距離、打撃フォームの3つの観点から行った。

形成的授業評価の結果より、A実践は児童に好意的に受け入れられるものであったことが確認された。打球の飛距離については、クラス全体で6.3mから3.7mへと下がったり、中位群で1%水準で有意に下がったりするなど、投げられたボールへの学習効果がほとんどみられなかったが、フォーム習得に関しては一定の学習効果が認められた。

以上のことから、ティーボールによる学習が、投げられたボールを打つ能力の向上につながるとは言えず、実際に投げられたボールを打つ学習経験の保証が必要であるという示唆が得られた。

<第3章>

第3章では、A実践で明らかとなった「止まっているボールを打つ学習が投げられたボールを

打つ学習に対してフォーム習得の面で一定の効果がある」という示唆をもとに、止まっているボールを打つ学習を半分、投げられたボールを打つ学習を半分で学習指導プログラムを構成し、その成果を検証した(B 実践)。その検証の結果、打球の飛距離が下位群において 2.0m から 13.1m へと 1%水準で有意に伸びるなど、飛距離に一定の学習成果が認められた。また、フォーム習得にも一定の成果が確認された。なお、形成的授業評価の結果から、B 実践が児童に受け入れられるものであったことも明らかとなった。A 実践では、飛距離への学習効果が認められなかったため、飛距離において成果が確認されたのは進歩であったと言える。しかしながら、上位群で飛距離が 20.1m から 10.0m へと有意に下がったこと、「スタンス」、「軌道」、「軸足」のフォーム得点が下がったことから、投げられたボールを打つ能力の向上を目指した学習指導プログラムとして更なる修正が必要と考えられた。具体的には、授業時間数の少なさ、投げられたボールを打つ試行回数の少なさについて改善が求められる。

<第4章>

第4章では、B 実践で明らかとなった課題を克服するために学習指導プログラムを5年生時に止まっているボールを打つ学習(C 実践)、6年生時に投げられたボールを打つ学習(D 実践)というように高学年段階にわたって系統的に実践を行った。C 実践の成果を分析した結果、飛距離に有意な伸びは見られなかったもののフォーム習得は十分になされる結果となり、授業も児童に好意的に受け入れられるものであった。A 実践で明らかにしたように、止まっているボールを打つ学習で身につけた打撃フォームは、投げられたボールを打つ学習にも一定程度つながるので、C 実践はD 実践に有機的につながるものであることが確認された。そのうえで、D 実践を行ったところ、打球の飛距離が下位群において 3.6m から 13.9m へと 1%水準で有意に伸び、全体としても平均 3.0m 伸びる結果となった。さらに打撃のフォーム得点では、B 実践で下がった項目がこの実践で

は改善され、得点が下がったのは「トップの中位群」のみであった。なお、形成的授業評価の結果から、授業が児童に好意的に受け入れられたことも確認された。

【結論】

本研究では投げられたボールを打つ能力の向上を目指した場合、5年生のときに止まっているボールを打つ学習、6年生のときに投げられたボールを打つ学習という、C 実践から D 実践への系統的な実践が最も成果を上げることが明らかとなった。これまでベースボール型の学習では、投げられたボールを打つ学習は小学校段階では早すぎると敬遠されてきたが、本研究により、学習指導プログラムを系統的に構成し、実施することにより、児童に受け入れられ、かつ投げられたボールを打つ能力を向上させる学習が十分に可能であることが示唆された。

【本研究の課題】

本研究では、投げられたボールを打つ能力を一定程度伸ばす学習指導プログラムを作成することができた。しかし、クラス全体の飛距離に有意差が確認されなかったことや上位群を下げる結果となってしまったことは課題として残る。下位群のみならず、技能の高い児童を授業のなかでどのように指導していくかは、今後学習指導の方法も含めて検討していく必要があるであろう。さらに、これが他の教師、他の児童になったときに同じ成果が得られるかは疑問が残るところである。したがって、今後はこの実践を量的に積み上げて学習指導プログラムの有効性を検証していく作業も必要である。

【文献】

文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 体育編一. 東洋館出版: 東京, p.73.
中川昌和 (2006) ベースボール型ゲームの単元構成に関する研究. 教育実践研究 16: 119-124.